

よびごえ

因速寺機関誌

VOL, 136



「悲しみは 貪欲^{とんよく}の悲鳴なり」。人間は悲しみの生き物だ。他の生き物は鳴くが、泣かない。泣く生き物は人間だけだ。私は泣くことが生理的なことだと思い込んでいたが、そうではなかった。悲しみは、貪欲を断念させられたときの悲鳴であった。人間には純粋な愛などない。人間の愛は「貪欲」である。「貪欲」とは、あらゆるものを貪^{むさぼ}り、自分のものにするようにする煩惱だ。自分の欲を満たすためには他者をも利用する。その貪欲を断念させられたとき、我々には「怒り」か「悲しみ」のどちらかがやってくる。孫が兄弟でオモチャを取り合っていた。欲しいものを相手に取られてしまえば、怒りが生まれる。オモチャならばよいが、家族が取り上げられる場合もある。それが「死」だ。「死」は貪欲を断念させる最大の敵だ。しかし、「死」は客観的な事実ではなく観念的なことだから安心してほしい。つまり、「学習することによって知り得たこと」なのだ。だから幼子には「死」はない。「死」が存在するのは、「死」を学習し「死」という観念をもったひとにおいてのみである。ひとは「一人称の死」を体験できない。他者の「死」を見て、自分に引き当てているだけだ。悲しみを抱えないひとはいない。でもそれは「貪欲」の涙に過ぎないのだ。

〈真・宗〉とは何だ？

武田 釋定光（住職）
しやくじようこう

■「真宗」と〈真・宗〉の違い■

皆さんは、「しんしゅう」という音を聞けば、すぐに「真宗」を連想するだろう。しかし、パソコンで「しんしゅう」と入力すると、一番初めに出てくる文字は「信州」である。これは「長野県」のことを表している。「信州信濃の新蕎麦よりも、わたしや、あんたのソバがよい」という都々逸もあるくらいだ。

私たちの宗派は、宗教法人法上、「真宗大谷派」と表明している。本山は京都の東側にあることから「東本願寺」とも言う。ただ「真宗」という名称よりも、「浄土真宗」という名前のほうが、皆さんには馴染み深いだろう。それで、「真宗」と聞けば、宗派の名前だと思ってしまう。確かに、宗派の名前なのだが、宗祖・親鸞聖人は、必ずしも「宗派」の意味で使っていない。

むしろ「教義の名称」として、「真宗」を多用している。主著の『教行信証』（総序）では、「真宗の教行証を敬信して、特に如来の恩徳のふかきことを知りぬ」と格調高く述べている。「〈真実〉の教えである『教行証』を敬い信じ、阿弥陀如来の御恩の深いことが分かりました」と。

私は「真宗」と「〈真・宗〉」を使い分けている。「真宗」と言えば宗派の意味だが、「〈真・宗〉」と言う場合は「〈真

実〉の教え」という意味で用いている。親鸞聖人が「教義」として用いた「真宗」と同じ意味を「〈真・宗〉」と表現している。さて「〈真・宗〉」とは、いったいどういう意味だろうか。

それは、「〈真実〉を宗とする」という意味だ。〈真実〉とは、「いのちの真実」のことだ。そして「宗とする」という意味は、この世を生きるための究極の中軸・基準にするという意味だ。

■ひとは「意味」に支えられている

人間は、「ただ」生きることではできない。必ず、意味を求めて生きている。仕事に出かけるひとは、「仕事をする」ということが、そのひとの生きる意味になろう。お子さんに「お父さん、いつもお仕事有り難う」と言われれば、その「意味」が満たされ、お父さんは嬉しくなる。「親が子どもを養うのは、当然の義務じやないか」と言われれば腹が立つ。お父さんは家族のためと思っ

て働いているのに、子どもは、自分の苦勞をまったく分かっていないと、愚痴を言うことにもなる。

それはそれでよいのだが、人生の究極の意味は何だろう、と問わざるを得ない場面が人間には必ずある。家族のためと思って働いてきたお父さんも、定年退職で仕事がなくなることがある。いままでは、朝早く仕事に出かけ、夜遅く帰ってくる生活だった。だから、「仕事」という意味に辛うじて満たされていた。ところが定年退職で「仕事」がなくなると、だんだんとその「意味」が失われていく。お母さんは、昼間、旦那の居ない時間を自由に使うことができた。ところが、「サンデー毎日」と揶揄されるように、お父さんは毎日自宅にいる。そうなるとお父さんの食事の支度やら何やらと、とかく手が掛かるようになる。そうすると、お

父さんの居場所がなくなる。以前近くに「親父^{おやじ}の居場所」という居酒屋があった。このお店のネーミングは、まさに「親父」の実体を見事に言い当てたネーミングだと感服した。

いままで「仕事をする」ということが「意味」として確保されていたが、それが怪しくなってきた。もつと酷い言い方で「粗大ゴミ」とまで皮肉られる。

こうなってきた初めて、生きることの本当の意味はなんだろうという問いに突き当たる。まさに「日暮れて道遠し」の感である。

■〈真・宗〉は「もう済んだ」と言わせない

しかし、〈真・宗〉には、「もう済んだ」という世界はない。つねに、「まだこれから」という「意味」を与える。それは〈真実〉を生活基準としているから言えることである。

定年退職をするとなると、それ相当のお年である。二〇二三年に割り出した、男性の平均寿命は八十一歳。女性は八十七歳だそう。その年齢を自分に当てはめては、まだ先が長いと考えたり、もう先がないと考えたり、あるいは、もう平均寿命を超えてしまっている人々も多いだろう。

まあ平均などということも幻想であって、自分の寿命とは無関係のことだ。なぜそういうことが言えるのかと言えば、それは〈真実〉という基準があるからだ。寿命は、「比べる」という世界でしか成り立たない。あなたと私の年齢を比べて、自分が老人か、向こうが老人かと言っているだけのことだ。誰しも、昨日よりは今日が一日老いているし、明日より今日は一日若い。それだけのことだ。〈真・宗〉は人間が「比べる」ことで悩んでいるから、その「比べる」という思いを捨てさせる。「比べる」という

思いは、〈真実〉ではないと。〈真実〉とは、人間をして、決して比べることのできないのちそのものに気付かせるはたらきのことだ。

■〈真・宗〉は『死なない』宗教

「〈真・宗〉は『死なない』宗教」である。「ひとはみんな死ぬ」と思っている。生きものはすべて「死ぬ」と。しかし、一人称の「死」を体験したとはいえない。体験したことがないのだから、それは「死」が分かったことにはならない。分からないものを分かったようにして、それが「真実」だとしがみついているに過ぎない。〈真・宗〉は、それはあなたの「思い」であって、〈真実〉ではありませんよと切り捨てる。だから、自分は「死なない」のだ。それは何も永遠に生き伸びるという話をしているわけではない。生理的には衰弱し停止状態になるだろう。たとえそうであっても、人間は「死なない」。他人の「死」を見て、それを自分に当てはめて考えているだけで、それが「本当の死」ではない。分からないものを分かったように考えて困っているだけなのだ。だから、それはあなたの「思い」であって、決して〈真実〉ではないぞと、「思い」と「事実」を切り分けて下さるものが〈真・宗〉だ。

我々は、「思いの世界」の中を這い回り一生を終わっていく。いち早く、この「思いの世界」から解脱すべきだ。「自分は老人だ」という幻想に押しつぶされるまえに、「老人」などはどこにも存在しないと目を開こう。そして二度と同じ事の繰り返しのない〈いま〉を生きよう。「火の車 作る大工はなけれども己が作りて 己が乗るなり」。これこそが〈真実〉の歌である。

得度 とくど そして 初出仕 はつしゅつし

祐歌房 一遇（練馬区関町）

「せっかく得度したのだから、『よびごえ』にその事に関して書いてください。」と定光先生からご連絡いただいた。それで、得度式のこと、得度後の気持ちの揺れ、約半年たった今の気持ちなど書かせていただこうと思う。

① 2023年6月23日 本山で得度式を受けさせていただく。

白書院という歴史的な建物で、白衣（素の自分）姿になった。心細く、頼りなく、緊張して、顔が引きつってどうしても笑顔になれなかった。

得度式はまず、御影堂 ごえいどう にて、一人ひとり御髪剃りの儀式を受けた。

ロウソクの灯だけの真っ暗な御影堂。

直感的に（ここは私の心の中だ！）と感じた。

順番が来て、門主様の「南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏」という本当に優しいお声が耳に届き、髪に剃刀 いとう があてられたのが分かった。

不安な心が優しい声に抱きしめられた気がした。

明るい廊下にでて、直綴 じきとつ という黒い法衣をつけて、私はホッと笑える自分に戻った。

阿弥陀堂で袈裟 けさ を被着、ご本尊拝礼、集合写真、視聴覚ホールで度牒 どちよう を一人ずついただき、「釈尼 しゃくに 一遇 いちぐう」の法名を授かり得度式は終わった。

② 心に空いた小さな穴ぼこ

得度後、因速寺のブッディサロンで定光先生から「得度して何か変わった？」と質問された。私は「それが：何も変わらなくて」と答えた。先生は「それは良かった！」と言われた。

得度しても私の生活は変わらず、日々忙しく過ごすことで精いっぱいだった。自分の年齢や母の介護の事を考えると、「得度するのは『今』しかない！」と感じての得度だったが、「得度して何を？」と訊かれると「良く分からない」というのが本音だった。「覚悟が足りない」と言われると言い返せない私がいた。

しかし、そんな私であつたが、得度後ちょっとした変化を感じることがあった。

「自分」という確かなものがあると思っていたが、「その時々自分の思い」しかなくて、思いは自分の都合とか、体調とか、その時のムードとかでコロコロ変わる。

自分の脳は信用できない？

『よびごえ』122号に書かせていただいたように、私は「自分は正しい！貴女は間違っている！」と悪意なく言い続け、コントロールしようとする母が嫌いで、幼い時から母を拒否して育った。

「母の主張とは違う『真実』があるに違いない。私はそれに出会いたい。」と切望したが、子供の私に出来ることは自分の中に籠ることだった。

今、気が付いてみたら、私の脳内の地図は三歳の子供のレイアウトで、幼稚な私の思い込みで書かれている。

自分が好きだと思っていたものは、脳が自分の持てるシナプス（験）をたどって「安易」「安全」と判断したものや「褒められて嬉しかった」もの。「嫌いだ」と思うものは、未経験だから、脳が「難しい」「不安」と判断したものや「嫌な思いをした」もの。

善悪のほうは、こともあろうか、母のそれと似ていた。

私はこんな古くて偏った心の中の地図を頼って運転してきたのか！だからいつも道に迷い、事故を起こしたのか！

そんな気づきの小さな穴ぼこが私の心にあいた。

私はアクセルもブレーキも踏む自信がなくなり、心のギアをニュートラルポジションにいったまま、必要なこと以外したくなくなつて、半年ほどぼんやり過ごした。あれほと言いたいことがあつたはずなのに…。

③ 報恩講 初出仕

2023年10月29日 因速寺創建400年の報恩講の法要が行われた。

私は僧侶として初出仕させていただけるということで、若院の

定志さんから、伽陀や五つ洵の念仏などを教えていただけることとなった。

こんな大切な法要に初出仕！いくら私でもぼんやりばかりはしていられない。

報恩講当日、伽陀を独特な節回しでうたう僧侶集団のなかに入れていただいて、樂が響き、目の前でご住職がヒラヒラと散華されていた。

ありや、ここはこの世？時代は？場所は？

得度式の時、真つ暗な本山の御影堂は「私の心の中」に見えたが、その日の因速寺の本堂は、ハリポッターの映画スタジオツアーならぬ、『真宗』いのちのスタジオツアー、時空を超えた世界の扉が開いているように見えた。

（私はスペクタクルなツアーのオーケストラボックスでうたう楽団員みたいだな）

（しかし、変だな？主演のご住職が観客に背を向けている。誰が観客？）

（あつ、そうなのか！）

お客様は阿弥陀様一人。

時空の扉を開いてそこにまします。
参加している一人一人が、全員、阿弥陀様にみつめられている演者だったのか！

不思議——————！！

ご法話二席とハンドベルの演奏も続いた。

報恩講が終わった。

定志さんが「こういう時『報恩講が円成えんじょうしました！』と言うのです」とニコニコ教えてくださった。

そうだなあー、本当に！皆の心が円になった時間だった。

時空を超えて、私の心にも不思議な虹が円くかかった気がした。

④相変わらずの私

次の日から、私は相変わらずヘタクソに自分の人生の運転している。

脳内が変わったわけもない。

自分の出す答えなど信頼できない。

かといって《ほんとう》のものなど私には

見えない！

私の現実ツアーは暗中模索。

それしか出来ない。

変わったこと？

迷ったとき、余裕があるときには、浮かぶ考えに（いやまてよ、きつとまた違うぞつ）と立ち止まることを覚えてくらいかな？

時々に出会う人に、道を聞きながら、

一步一步、手探りで歩いていければ……。

それが、今の私の気持ちです。

南無阿弥陀仏 合掌

■「得度」とは「度牒を得る」ことで、形式的に言えば「在家生活から出家して僧侶になること」である。かつては、僧侶の資格を国家が認定していたが、現在では、各教団が認定することになった。だから形式的には「得度式」を受ければ、浄土真宗の僧侶と認められることになる。しかし、これはあくまでも真宗の門に入るための入門式であり、卒業式ではない。果たして真宗の僧侶とは、どういうひとのことをいうのだろうか。これはなかなか難しい問題だ。佐野明弘先生が、禅宗の雲水うんすいだったころ、僧侶とは何かに疑問をもたなかった。しかし、真宗の僧侶になってみると、果たして僧侶とはどういう存在なのかが分からなくなったとおっしゃっておられた。それも分かる気がする。真宗は、「これができるからお坊さん」ということを許さないからだ。「お経が読めるから」とか「坐禅や瞑想ができるから」とか、あらゆるお坊さんの条件を剥奪されるのが真宗だからだ。言わば、あらゆる僧侶の条件が剥奪された存在が、本当の「真宗僧侶」である。私が彼女に、得度式を受けて何か変わったかを尋ねたとき、「何も変わらなくて」と応えた。私は、それを聞いて「よかった」と思った。もし以前の自分と変わっていると思ったら「真宗の僧侶」失格だからだ。「何も変わらなくて」とは、阿弥陀さんが何も変わらな

住職

なぜ、写経をするのか

不善菴 秀次郎（江東区東砂）

そう、住職に尋ねられてからぼくは二ヶ月ほど答えが見つからず悩んでいた。「悩む」とは、ちと大げさだが。とにかく答えが見つからないのである。そこで写経を始めたきっかけに立ち戻ってみることにした。

中野・新宿界わいで生まれ育ちぼくが東砂の団地に移転してきたのは、二年前のことであつた。コンクリート住宅が建ち並ぶ人工的なこの街に溶け込めず、団地の風呂にもなじめず、銭湯通いをするうち、因速寺の門前に「写経の会」の看板を見つけたというわけである。

父方が浄土真宗であつたこともあり、その日のうちに入会を申し入れ、今日に至っている。その時のぼくには、写経が死者への供養のためとか、印刷技術が未熟な時代、僧たちが経文を書き写して布教の一助としていたことなど知るよしもない。

唯、経文を書き写すという作業よりも、さらにシンプルに印刷された経文をなぞる。つまり、「しきうつす」ことに驚いた。

しかし、本堂に入り写経を始めると、不思議に心が静まりかえり、聞こえていなかった生活音が聞こえてくるのである。

やがて先刻まで見ていたテレビの映像が甦り、プーチンやネタニヤフ等の歪んだ顔が浮かんで消えていく。地球温暖化は、い

なく続く領土の奪い合い。さらに核の使用などにエスカレートな

どすれば、この小さな惑星は早晩消滅してしまうだろう。

妄想は果てしなかった。

あれから二年。いまでは月に一度、己を静止させ、己と対話するという貴重な時間になった。門前の小僧ならぬ八十路を越えて写経を始めた爺さんだが、いまだに経文の一行たりとも理解できないでいる。

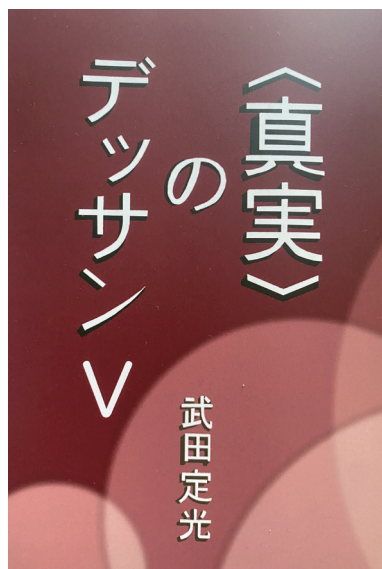
なぜぼくは写経をしているのだろう。

振り向けば 悔いの八千度 みぞれ道

■ひよっこり「写経の会」にお見えになり、言いたいことを言っ
て帰っていかれる服部さん。うちの「写経の会」のテキストは、
薄墨で経文が印刷されている。その上を筆ペンでなぞるだけのシ
ンプルなものだ。しかし、この作業をしていると、静まりかえつ
た時空間の中で、それこそ自己内対話が深まる。彼は「回文」の
達人だ。「回文」とは上から読んでも下から読んでも同じ発音で
読める形式の文学だ。単純なものは「竹藪焼けた」に始まり、高
度なものまである。俳句や短歌のように季語を入れるなどの喧し
い決まりがない。それでいて、人間の妙味を歌っている。決まり
がないと言ったが、上から読んでも下から読んでも意味が通じる
句など、作れるものではない。因速寺にいただいた句を、無断で
紹介する。「今朝の冬 昼は小春日 冬の酒」「長き糸 寡黙な
蜘蛛が吐息かな」「蟬のどか 留守に何する 角の店」「金星は虚
空に浮く孤 敗戦忌」「言の葉よ 虫の音の沁む 夜半の床」。意
味があるようなないような、それでいてひとを頷かせる。作者は、
暇人の道楽だと謙遜するが、好きで出来るものではない。住職

New!

住職新刊本発売



実費冥加金 500円

癌に患られた女性がいた。彼女、何で自分が癌に罹ったのだろうかと、ずっと悩んでおられたそう。そして、そのことの「原因」を追及していた。自分の生活習慣が悪かったのか、食生活の何が悪かったのかと、自分の行いの何が悪かったのだろうかと、自分を責めていた。ところが、「善いことも悪いこともすべて阿弥陀さんのせい」という法語を目にしたとき、いままで自分を責めてきた気持ちから解放されたと言った。自分に「原因」はなかったのだ、すべて阿弥陀さんが「原因」だったのだと、肩の荷が下りたそう。別に、それは「阿弥陀さん」という仏さんがいて、この仏が私を癌にしたという意味ではない癌になった「原因」は、自分はもちろん、誰がわるいものでもないその「原因」は、誰にも分からないということに身をまかせることができたということだ。

◆六組間法会◆

テーマ：『なぜから始まる歎異抄』

第二回 1月13日(土) 午後2時～5時

第三回 3月9日(土) 午後2時～5時

会場：1月は勧勝寺(東京都港区芝1-9-11)

3月は因速寺(東京都江東区東砂1-4-10)

雑言雑語

今年も報恩講シーズンを迎え、各お寺さんの報恩講参りを終え、本山の御正忌報恩講に参詣することができた。参詣席から参る本山も久しぶりだったので、門徒さんと並びながらの参詣でした。二十七日の結願逮夜には、池田勇諦先生が一般出仕されている姿を見て頭が下がった。先生もこ本山を大切にされているのが伝わってきた。准堂衆では東京教区の方、三名が外陣に出仕されており、自分が初めて本山の外陣に出仕したときの事を思い出した。二十八日の結願日中では、本堂に「身を粉にしても、骨を砕きても」と歌われる様に、二十一日の初逮夜から一週間二十二座という長いお勤めの最後を締めくくり、今回初の報恩講に出仕されていた方は御満座で涙がでたと仰った。二十九日の晨朝は式に関わった、本山の方々は皆出仕され、ご門主が御真影の扉を開けられる。御真影の姿がお見えになった途端、「南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏」周りからお声が聞かれた。懐かしい面々の人にも再会でき、親鸞聖人が遇わせてくれたんだと、改めて思わされた。何より報恩講の次の日は仏智疑惑から始まる。仏智疑惑でしかない私の為に勤まつたんだと思った。今回お会いできた方も出来なかった方も、また本山の報恩講でお会いしたい。 釋定志

表紙画題

『嫁菜の花』

(田園蝶舞のふうちゃんのお庭より)



『よびこえ』 一三六号

発行所 因速寺(真宗大谷派 本山 東本願寺)

〒136-0074 東京都江東区東砂1-4-10

TEL (03) 3644-0986 FAX (03) 3648-4391

Email info@insokujii.com

HP https://insokujii.com

武田美輪(坊守)

編集・発行 武田 定光 Takeda Jyunko
発行日 二〇二三(令和五)年十二月十五日

Copyright 1990 INSOKU-JI Printed in Japan